

## 「研究論文・実践報告」

### 北米 YMCA 研修から生まれつつある、宇野小学校区ピースコミュニティ

会員番号：No. 669 太田直宏（岡山 YMCA 総主事）

#### 1) はじめに

岡山 YMCA は、昨春より公立小学校（岡山市立宇野小学校）のなかで放課後児童保育をスタートさせた。同じく「岡山 YMCA フィランソロピー協会」の立ち上げも行った。これらの働きは、地域のなかでより公益に寄与する働きを為していこうとする私たちのミッションの具現化に他ならない。「YMCA が生き残る」ためではなく、「YMCA がいかに地域の諸団体と協働しながら、社会を変革していくか」学社融合で言うところの「win&win」が北米でも実際に行われていると聴いていた。そんな視点を基盤に、米国のさまざまな事情を見ることができたことは幸いであった。

以下のような一連のプロセスは実際彼らと話してみて気づかされたことである。

- ①既存の社会システム自体が危機に瀕していること（たとえば公立学校のあり方など）
- ②そのことを良しとしない「数人」の思いから全ては始まっていること
- ③税制が NPO に有利だから、人々は簡単に寄付してくれるなどという単純な事柄ではなく、全てはハードワークであること
- ④ミッションに基づいて全身全霊で取り組んでいること
- ⑤それら全てを眼に見える形で、さまざまに提示していること

こうして箇条書きにしてみると、すべては日本の状況と合致していることに気づかされた。後はそれを誰と共にいかに具体化していくかであることが分かったのだ。

#### 2) ディズニーワールドリゾート Family センター

オーランドといえば、ディズニーランド。そのディズニーの従業員の方々のこどもたちのための保育園を YMCA は運営していた。ディズニーランドの従業員の仕事自体が不規則で、年中無休であるため、このセンターも、柔軟な運営で、かつ高品質、なおかつリーズナブルな価格の保育サービスを提供しており、結果として、米国 YMCA ミッションを果たすことに寄与していた。広大なディズニーランドの土地の一角にある施設は、周りの風景ともよくマッチしており、非常に清潔なイメージである。またサインボードには、YMCA マークとミッキーマウスのシルエットが活かされ、いかに両者の協働関係が良好かをよく表している。両親が共働きの家庭が多いようで、仕事と家庭生活を YMCA がしっかりと支援している。彼らの言葉を借りれば、

- ①子どもたちが好ましくて、革新的で、教育的で、楽しい幼児保育プログラミングを経験することで、彼らの最も高い可能性を成し遂げるのを奨励している。
- ②スタッフ、子どもたち、両親と家族の間で **Caring、Honesty、Respect、Responsibility** の価値を育てる。（これは YMCA が提供している価値教育キャンペーンの一環である）
- ③個々に、そして、一緒に全ての家族の精神的な、肉体的および精神的な成長を通して、家族の成長と学習を支持する。

という働きをしっかりと果たしているようである。

うらやましい！と思ったのは、ディズニーランドとの関係が深いので、時々ミッキーマウスはじめ、さまざまなキャストたちが訪れ、こどもたちを楽しませてくれていること。もしかしたら中に入っているのは両親たちかもしれないけれど、それはそれでよい意味でメンバーシップデザイン（受益者として参加した会員を運動の担い手へと変革させるYMCAの経営手段のひとつ）の具現化とも言えるなあとの感想を持った。日本のディズニーランドの場合はどうなっているのだろう。是非とも浦和の方々に調べていただきたいと思った。

### 3) ノナ YMCA ファミリーセンターの事例

オーランドについて、最初に訪れたのがこのセンターである。コンファレンス始まる前にオプションツアーとして訪問が計画されていることから推察されるのは、非常に注目されている特色ある活動であるということだ。実際、ミシシッピやアイオワ等から参加したスタッフたちも、このセンターの活動に一応に感嘆と賞賛の声を上げていた。

このセンターは、建物をノースレイクパーク Community 小学校と完全に共有している。小学校の壁に堂々とYMCAのマークが掲げられていることにまず目を奪われた。しかも校舎の建設には、2つの企業がスポンサーとして加わっている。つまり、レイクノナ資産ホーディングス社、オーランド地域のヘルスケア会社に加えて、オーランド市当局、セントラルフロリダYMCA、オレンジカウンティ公立学校の5者が協働して出資した形をとっているのだ。受付後ろのサインボードにこの5者のロゴがしっかりと掲げられ、このセンターの性格を現していた。このプロジェクトは、全米でも最初の試みである。資源を共有することによって、数百納税者ドルも節約され、その結果としてコミュニティのハブ（基地）と呼ばれるべき存在が確立された。オーランドシティは、スペースを提供し、レイクノナ開発は、施設の管理を提供し、YMCAは、良質な健康プログラムを地域の全家族に提供している。そして、学校は学習のみならずさまざまな社会資源をも提供しているのだ。

こどもたちはもちろんのこと、教職員・YMCAスタッフ・保護者があたりまえのように施設のなかを自由に行き交っていることに驚きを覚えた。実際どこまでが学校で、どこまでがYMCAなのかは良く分からなかった。というよりは完全に共有しているというのが事実なのであろう。考えてみれば、そのような形で社会資源を共有することは、お互いにとって経費の節減に他ならない。うまいやり方を考えるものだと思ったが、YMCAに対する全幅の信頼がないければこのような事柄は起こりえなかったと言える。まさに地域にとってなくてはならない存在としてYMCAが生きていることを実感した。一方で安全に関する事柄は徹底している。児童の送り迎え時のセキュリティチェックのみならず、入り口には必ずセキュリティ装置がすえつけられ、ボランティアもスタッフも全員無線機を持ち、絶えずコンタクトをとり続けていた。

どのYMCAを訪問しても、廊下や教室の壁に、各種キャンペーンのポスターがきれいにディスプレイされていたことがとても印象的であった。こどもや保護者に伝える手段としても有効であると感じた。ここノナファミリーYMCAにだけあったのが、ブッシュ現大統領の演説写真。個人的には同じクリスチャンとして、ブッシュのあり方に批判的な立場の私は、思わず隣にいた米国スタッフに「Is he a member of YMCA?」と聞いた。彼らもど

うも要領を得ない応えだったのだが、数日後フロリダ YMCA の総主事と会談して疑問は氷解した。このケースが非常にパイオニアケースと位置づけられているので、時間を作ってわざわざブッシュはここを訪れたのだそうだ。立場はともあれ、そのようなケースを見学できたことを幸いに感じている。岡山で開設予定であった小学校内での学童保育事業のあるべき姿を見せていただいたような気がして、勇気をいただいた訪問であった。

当時岡山で計画している学童保育の実施は、困難山積であることが推察されていた。しかし、やろうとしていることは、期せずして米国で今行われている「win&win」の手法を取り入れていることもわかり多くの気づきをいただいた。これは「give&take」のように何かを与えてその見返りを求めるのではなく、そのプロジェクトに関わる全ての組織が、「良い成果を生み出す」ことであり、それは「格差社会を作り出すことと対極にある考え方である」と融合研での交流を通して学びつつあったことは実に幸いであった。

### 3) 宇野小学校 PTA のこと

当時私たちは、公立小学校の敷地内で学童保育を既存の組織から受け継ぎ、新たなスタートを始めようとしていた。そもそもの始まりは、私が PTA 会長を務めている宇野小学校の学童保育の運営委員に就任したこと。いえ、もっと遡れば、私が行きがかり上、娘の小学校の PTA 会長を引き受けたことがその原点。その頃宇野小学校は学校内にコミュニティハウスという名の地域の方々の居場所を創るか創らないかで大もめに揉めていた。結果的には PTA と学童保育の保護者が「こどもの安全」を考えるとこの案は受け入れがたいという選択をし、地域の方々の思いを汲み取れずに、提案を否決するという局面を迎えていた。結果的にはこの事柄を巡って地域と学校の関係は断絶。そんなこととはつゆ知らず（無関心だった）私はたまたま参加した PTA 行事で行った「バスレク」が面白かった！という理由で PTA 会長に推薦され、その役を引き受けることとなった。しかしながら、コミュニティハウスに端を発した地域との溝は思たよりも深く、会合の度に「あなたたちがはしごを外したのよ」と言われ続けた。ところが皮肉なことに、04年度に子どもたちが巻き込まれる悲惨な事件が相次いで起こったことにより、私の PTA 会長としての初仕事は決定づけられた。再び子どもたちの安全についてさまざまな論議が始まったのだ。校門を閉めること、監視カメラをつけること、携帯メールによる不審者情報の配信などなど、多くの事について語られた。しかし、その議論の過程で、「果たしてこれらの対処法は、子どもたちにとって、地域社会にとって有益なのだろうか？かえって地域の中に『不信感』というマイナスのスパイラルを引き起こすことになりはしないか」という疑念が湧き上がり、そのような方向性、つまり「北風」政策とは反対の「太陽」政策が必要ではないかと PTA 一同で考えたのである。それは 地域の子どもたちの心に、やさしさと安心感を回復させるに違いないと思い、そこで「楽しさ」をキーワードにした PTA 活動を実践しようということになり、「プロジェクト LOVE & PEACE」を始めたのである。

#### A) 04年度～暗中模索の時

##### ① 校内安全調査

近隣の高校で不審者侵入事件があり、翌日、宇野小学校でも校内安全点検を行なった。参加者の少なさにがっかりしたが、教職員や学童保育の指導員とのつながりが生まれたことは成果であった。

## ②学区内落書き調査

岡山が日本一の落書き県として悪名高くなったことを受けて、地域の方々と一緒に落書き調査を実施した。結果として、宇野小学校区は落書きの多発地点であることが再認識され、また落書きのような軽犯罪が、殺人・放火などの重犯罪につながることもわかった。子どもたちから「調べたからには、消そうよ」という声があがった。

## B) 05年度～試行錯誤の時

### ①学区落書き消去活動（全国社会福祉協議会主催コンテストにて入選）

落書き調査をもとに、消去活動を行った。子どもたちや町内会の方々のみならず、学童保育・児童養護施設善隣館・YMCA・落書き調査隊などの組織も加わり、150人規模で一斉に行うことができた。JRや岡山県、道路公団などのサポートもあり、効果的な活動を行うことができ学区の中が非常に美しくなった。また活動を通して、子どもたちと地域の方々の顔の見える関係が再構築される機運が高まったことは何よりうれしい事柄だった。この一連の動きを小論文にしたところ、全国社会福祉協議会主催のコンテストで全国3席として選出され、コミック化されたことは何よりの喜びであった。

### ②開かれた学校づくり

とにかく大勢の方々に学校に来てもらおうとの思いから、文科省事業である地域子ども教室推進事業」の予算を使い実施しました。PTAから地域に呼びかけて実行委員会を組織し、保護者と子どもが楽しく関係性を深めることができるような活動を企画した。具体的には1) 囲碁にチャレンジ、2) ヒップホップダンスをしよう、3) ダブルダッチ縄跳びを楽しもう、4) 沖縄のシンガーによるピースコンサートを行った。内容は非常に充実したものであったが、保護者の参加が少ないことが課題となった。

### ③安全マップづくりと「うのっこパトロール隊」誕生

05年の秋に栃木、広島で相次いで児童殺人事件が起こり、地域の方々から「やっぱり、子どもたちの安全を守ってやりたい！」との声が上がリ、パトロール隊を組織しようという機運が盛り上がった。そこで学校内で子どもたちから愛称を募集し結果的に「うのっこパトロール隊」という名前に決まった。何の変哲もない名前であるが、自分たちがネーミングに関わったというインパクトは大きく、あつと言う間にこの運動は浸透した。パトロール隊には全町内会が参加し、連合町内会長が自ら隊長を引き受けてくださった。PTAも、当初予定していた餅つき大会を急遽「安全マップづくり」に変更し、パトロール隊にも加わってもらった。立正大学の小宮信夫教授が提唱する「犯罪は人ではなく、場所に起因する」という理論をベースにした「安全マップづくり」は大変楽しく、大人も子ども改めて地域の良いところを見直し、悪いところに気付くことが出来た。驚いたのは学校の先生方が通学路や学区のことを保護者以上に大変良く把握されていたことであった。互いの不足を補いながら「楽しく」問題を解決していくことの大切さを学ぶことができた。このパトロール隊の活動により、学区内の犯罪の件数は激減し、子どもたちは「信頼できる大人がこの学区にはたくさんいる」ことに喜びを感じ始めた。岡山県青少年問題を考える100人委員会提唱のあいさつ運動の具体化により、子どもたちの挨拶の声も大きくなり、学区の雰囲気も明るくなった。また、パトロール隊のみなさんへのお礼として、校長先生の発案で「給食ご招待」を行い、大変喜んでいただき、お互いが労り合う関係が再構築された。

#### C) 06年度～活動の定着期

「プロジェクト LOVE & PEACE」の活動3年目となったこの年は、委員として中央公民館や善隣館（児童擁護施設）の職員にも加わっていただき、より地域に開かれた取り組みとなった。実際に行ったのは①星空映画会（学校の校庭での野外映画会）、②カードゲーム「UNO」全国大会予選、③子ども主催のフリーマーケット（公民館との協働です）、④安全マップづくりその2、⑤ユニバーサル体験活動でした。どの会にも保護者が大勢参加するようになってきたことはなによりの喜びであった。特に「UNO」大会では、日本に3校しかない「宇野」小学校でカードゲーム「UNO」をするというコンセプトが面白がられ、販売元のマテル社をも巻き込んだ楽しいイベントになった。テレビゲームにはない「顔と顔を合わせて行うカードゲームの面白さ」がみんなの心を捉えたのだ。現在もこの活動が続いており、07年度は島根の宇野小学校、08年度には玉野市の宇野小学校も参画し、地域を越えてますます盛り上がってきている。またフリーマーケットでは思いのほか多くの売り上げがあり、子どもたちの発案で、パトロール隊のみなさんに日頃のお礼としてカイロをお贈りすることができた。その思いやりの心にパトロール隊の方々も感激であった。

#### 4) 宇野小学校での学童保育サポート

「現状を良しとしなかった数名の思いが、多くの人々を動かしたからです」地域の公立学校と見事に協働しているYMCAのアフタースクールプログラムを拝見した私は「このプログラム成功のカギは何ですか」と質問した。その問いに対してセントフロリダYMCAの総主事はこのように応えたのだ。

当時私たちは、公立小学校の敷地内で学童保育を既存の組織から受け継ぎ、新たなスタートを始めようとしていた。しかしながら、岡山で開始した学童保育、当初は問題山積であった。そもそもの始まりは、私がPTA会長を務めている宇野小学校の学童保育の運営委員に就任したこと。学校の仕組みそのものが脆弱な基盤になりたっていると気がついた私は、同時並行的にいくつかの改革をすすめてきた。例えば夏休みのプール開放、学校購買、安全安心メールなどなどの重要なシステムの責任の大部分をPTAのみが担っているという事実。こどもの安全管理や納税義務など到底保護者だけでは担いきれない大きな責任を引き受けていることを知って驚いた。しかし逃げていられないので、すべてをリスクテイクしていくというスタンスで問題解決を進めていた。ソリューションのポイントは、「win & win」。プールでは安全管理者としてのYMCAスタッフ、学校購買には税理士に入っただき、全てを整えた。お蔭でそのほぼすべてのシステムが「持続可能」となった。そして、最後に残ったのが「学童保育」だったのだ。

PTA会長就任後しばらくしてから、「学童保育」の運営委員会なるものに呼ばれた。当然これも学校が主催していると考えていた私は、そこで驚愕の事実を知った。90人もの子どもを預かって、年間1800万円近くの予算を執行している組織の経営責任者が「わたしたちのような宛て職の委員」であることを。しかしながら「運営委員」とは名ばかりで、委員は現場の実態をほとんど把握していないという状態であった。90人に上るギャングエイジの子どもたちのプログラムのマネジメントは熾烈である。当時の指導者の方々も最大限の努力をされていたが、安全という視点から見れば常に不安を抱えた毎日であった。しかも制度上は何か事故があれば、運営委員の責任だったので「委員を返上するか、積極的に責任を担うか」選択肢は2つに1つであった。逡巡する日々を続けていた0

6年10月、にわかにくいつかの重大な問題が噴出し、保護者のみなさんからの強い要請で「持続可能な体制への変革」が決議された。その後の数ヶ月の真剣な討議を経て、YMCAに白羽の矢が立った。困難な道になることは意識していたが、それが子どもにとって最善の道であると確信し、祈りをもって協働運営に踏み出すという選択をした。3月の春休みより、いよいよ活動を開始。指導者も全面的に替ったので、まずは子どもたちと向き合うことからはじめたが、一筋縄に心を通わすことはできなかった。お話を聴くことができない、食事の時は立ち歩く等々長年の構造からの脱却をめざして、日々苦闘を重ねた。3歩進んで2歩退くといった歩みのなか、思い描いたようなスムーズな改革は進まなかったが、子どもたちにとって良き居場所とするために何が必要かの議論を重ね、改革を続けた。幸い宇野小学校はこの体制を全面的なバックアップし、学区内のさまざまな組織もわれわれを献身的に支援してくださった。

宇野小学校区内で初等教育学科を設立したばかりの就実大学からは、夏休みにインターンシップとして23名の大学1年生を受け入れた。大学としては、4年後の卒業生をいかに良い教師として育て上げるかが大きな課題なので、若いリーダーシップの必要性を感じていた私たちと思いが一致し、この制度が実現した。若者たちにとって、早い段階でのこのような経験は彼らの教師へのモチベーションを非常に高めた。結果、子どもたちもこれらの若者たちに出会ったことで彼らへの憧れベクトルが生まれ、このことを境に急激に状況が好転していった。

## 5) 課題と展望

現在では、80名を超える子どもたちが、日々元気いっぱい学童保育に通ってくるようになった。勿論問題が全くなかったわけではない。保護者の方が何らかの形で就労している家庭の子どもたちがほとんどなので、彼らのランドセルの中には、学用品以外に見えない重たいものがいっぱい詰め込まれているような気がする。ゆえに我々は決して現状を良しとは思っていない。取り組むべき課題はまだ多い。どこの学童でも状況は同じだが、特別に支援の必要な子どもが増えている。そのための仕組みづくりも急務である。

07年9月に宇野小学校が開学120周年を迎えたのを契機に、「PTAと地域住民が一体となって学校を支えると同時に、開かれた宇野小学校に生まれ変わっていこう」と、学校評議員会で決議された。今さまざまな活動をPTAと地域・YMCAとの協働プロジェクトに変革させていこうと計画である。また、「点字ブロックを世界で初めて敷設したのは、宇野小学校区」という歴史的事実から発展させ、「世界で一番人と社会にやさしい街」にできればと考えている。今宇野小学校区には、プラスのスパイラルがあふれ始めている。

「UNO」はイタリア語で「1」という意味。すなわち、私たちの学区は、その名前の由来から「オンリーワン」になるべき運命を担っている。「日本は平和である」と言われて久しい。しかしながら、平和とは「戦争がない状態」の事を言うのではない。格差社会・貧困・家庭内暴力・いじめなどで自らの命を絶たざるを得ない方が多い今の状況は「平和」からかけ離れたものであろう。イラク戦争で亡くなった人以上の数の自死者がいるこの国。多くの子どもたちの安全と安心を守ることができない国、日本。こんな時代であるからこそ、小さくても、子どもたちが「愛されている」と実感できる平和で、オンリーワンなコミュニティを創り出すことを「win&win」をキーワードに今後もと続けていきたい。